

# 都市を創り、都市を育む

## 東京を世界一の都市にしようと

### 「本気で考える」街づくりの仕事

森ビル株式会社 平野文尉氏

OB  
探訪



都会のど真ん中、六本木ヒルズで田植えをするなんて—東京都港区を中心に都市再開発事業などを展開する大手不動産総合ディベロッパーの森ビル株式会社(本社=東京・六本木)ならではの発想だ。新規開発プロジェクトのプランニングを担当している平野文尉(ひらの・のりやす)氏(46)は中央大学理工学部の卒業生。この人の手にかかれば、東京の街が変わっていく。

写真:六本木ヒルズの屋上庭園で田植え。既成概念にとらわれない森ビル株式会社らしいイベントだ(提供=森ビル株式会社)

# 「街」はあらゆる活動の基盤。 だからこそ、住む人、働く人、訪れる人、 あらゆる人に思いを馳せる<sup>は</sup>

たとえ森ビルという会社を知らなくても、六本木ヒルズ(開業2003年)、表参道ヒルズ(同06年)、さらには東京の新たなランドマークとなった虎ノ門ヒルズ(同14年)なら見たことがあり、行ったことがあるだろう。

1992年入社 of 平野氏は、都市開発本部計画統括部施設計画部課長。森ビルの進める新規開発プロジェクトのプランニングを担当している。

街づくりは地道な仕事の連続だ。

六本木ヒルズは、約400件の地権者と17年以上の歳月を掛けて開発された。開発前の計画エリアには中小のビルや低層住宅が密集して立ち並び、狭い一方通行道路には消防車が入れない、防災上の課題を抱えた地域でもあった。地権者一人ひとりとエリアの将来について話し合いを重ね、行政や設計者、施工者など様々な関係者との協議を経て生まれたのが、オフィスや住宅、美術館、映画館、

テレビ局、ホテルなどを擁する「街」、六本木ヒルズだ。

同社は、「都市を創り、都市を育む」の考え方のもとで、街を絶えず賑わいのある場所にする。例えば、六本木ヒルズにあるビルの屋上庭園には水田や畑が設けられており、田植えや稲刈りなど様々なコミュニティ活動が行われている。参加する地域の子供たちや外国人居住者にとって、都会のど真ん中で日本の伝統的な



東京都心にそびえ立つ六本木ヒルズ森タワー。見る角度、時間によって、建物の表情が変わる点も特徴的という。左の六本木ヒルズレジデンスはイギリスを中心に活動する建築デザイナー テレンス・コンランのデザインだ(写真提供=森ビル株式会社)

稲作文化に触れる体験は、忘れられない思い出になるはずだ。同社のビジョンを具現化していると言ってい

いだろう。  
同社の街づくりでは、自分たちの開発区域だけでなく都市全体を俯瞰しながら、地域と共生する街を目指していくという。ビル単体の開発として捉えるのではなく、地域全体を捉えながら「街」を作っていくという考えだ。

その中で、平野氏が取り組むのは

新規開発プロジェクトのプランニング。新たに進めるプロジェクトの用途構成などを計画するのが仕事だ。オフィスの側にホテルが欲しい。保育園はどこにあるのがいいだろう。「街」はあらゆる活動の基盤だからこそ、住む人、働く人、訪れる人、あらゆる人に思いを馳せる。「ゆくゆくは、世界中からも色んな人が目指して来るような街にしたい。その結果、世界の中で『東京』のポテンシャルを上げることが出来たら」



森ビル 都市開発本部 平野文尉氏



ディベロップメントからタウンマネジメントまで。地権者や行政、設計事務所、ゼネコンなど、多くの関係者とともに歩み、つくっていく。

あらゆることがそのフィールドにある同社の街づくりは、未来に関わ

る全てが仕事といえる。

仕事のスケールは無限大だ。

## 理系で文系就職

中大理工学部電気電子工学科(現電気電子情報通信工学科)では、携

帯電話の無線通信などマルチメディア・IT系の研究をしていた。理系学生の就職活動は専門分野を生かして、大手電機メーカーの研究部門へ進むことが多かった。

平野氏らは「文系就職」と呼ばれ

これは都市模型です



森ビルで制作している1/1000サイズの都市模型。プロジェクト地だけでなく都市・景観を俯瞰的かつ客観的に捉えるためのツールとして独自に制作し、計画の検討や関係者への理解促進など、実際の都市づくり、景観づくりに活用している。都市模型の制作は2003年。

都市模型には後樂園キャンパスが見える(点線の部分)

た。理系では異色の存在。「一生に一度の就活ですから幅広く考えたかった。研究室の先輩から、森ビルを『面白いよ』と勧められました」

森ビルの企業説明会に参加した。「衝撃を受けました」という言い回しで運命の出会いを語る。

説明会で紹介されたのはヒルズの原点・アークヒルズ(港区赤坂)。民間による日本初の大規模再開発事業により生まれた、24時間眠らない「複合都市」には外資系企業が多く入居していた。「アークヒルズには外国人ワーカーや居住者が多くて、海外旅行に来たようでした。次に森ビルが取り組む開発は六本木ヒルズ。大きなプロジェクトに若くても参加できると言われ、感銘を受けました。さらに『幅広い人材を求めています』と言われて、文系理系に関わらず、活躍できることも魅力でした」

が然興味を持った。文系就活と決めてから商社、金融、メーカー、エネルギー、マスコミなどを調べていたなかで、森ビルの存在が大きくなっていった。

中大就職課(現キャリアセンター)に感謝しているという。当時はインターネットがなく、就活情報は大学に集まっていた。「入りびたっていましたね。悩みも聞いてもらいました」。そこで気付いた。「売るのは自

分しかありませんから、自己分析と志望動機をひたすら考えていました」

在学中はアルバイトにも思い出がある。大手企業の社内レストランだ。

1月には賀詞交歓会を間近で見た。社会人が何十枚もの名刺を持ってあいさつに回る。企業のトップがVIPを招く際には注意事項がいくつもあった。お客様用メニューには料金表示がない。メニューの出し間違いは許されない。

トップの嗜好も事前に叩きこまれた。快適なひとときを提供する舞台裏には、こんなにも準備が必要なのか。徹底したサービスを心掛けるスタッフに驚嘆したものだ。

学生には遠い世界だったが、アルバイトを機に、「社会を知り、社会の仕組みを知りましたね」

後樂園キャンパスでは、授業が終わるとバスケットボールに興じた。所属した「理工白籠会」は理工系大学リーグ戦やトーナメント戦に出場。中央区の一般大会にも参加した。

5階建ての5号館には教室・研究室・実験室のほかアリーナ(体育館)、学生食堂、生協売店などがあり、「一つの建物のなかにさまざまな用途がある。一日がそこで終わる。今思えば森ビルがつくる複合都市みたいです(笑)」

## 未来をつくる

今後目指すのは、東京を世界一の都市にすることだという。

「日本はかつてアジアのヘッドクォーターでした。バブルがはじけて、その座は香港、シンガポールへ。日本はアジアの特別な国ではなくなりました」

「日本をアジアのヘッドクォーターにしよう。東京を世界一の都市にしよう」と本気で考えています。面白い会社です」

森ビルのシンクタンク「森記念財団」の調査によると、いま東京は世界第4位。首位はロンドン、2位ニューヨーク、3位はパリだ。

「何をすれば1位になれるのか。考えて街づくりをしています」

未来は与えられるものではなく、自分たちでつくりあげるものだという。東京の未来は平野氏の手にかかっている。



### 巨人ファン

中大後樂園キャンパスはプロ野球巨人の本拠地・東京ドームのすぐそばに位置する。「巨人が好きでよく行っていました」

巨人戦チケットは入手困難だった。巨人ファンの集まる、千代田区大手町の読売新聞社チケット売り場などに並んだ。「列に並ぶ社会人の営業マンと話

をしていて、お客さんのために接待で使うと聞いてびっくりしました」

巨人が4連敗した1990年、西武との日本シリーズ。「徹夜して、風邪をひきながらも、やっと買ったのに負けた。初戦から悔しい思いをしましたが、これも人生かと」。投資と結果は結び付かないことを知った。

### 学食でステーキ

後樂園キャンパスの学生食堂。当時の運営会社はステーキを名物とした。「バイト代が入るとステーキを食べていました。おいしくて安かった。サークルのたまり場でしたね」。多摩キャンパスへは入学後半年間、体育授業などで通った。「通学に2時間ほどかかり遠かったけれど、ヒルトップはよかったなあ」



～取材を終えて～

## 私も幅広い視野で考えたい

学生記者 増田ゆり (文学部2年)

大学1年のころから六本木の喫茶店でアルバイトをしている。六本木ヒルズ周辺を行き来するたび、開業以来10年以上経った今も東京を象徴する超高層ビルに体が吸い込まれそうになる。

平野さんとのインタビューで、私の六本木ヒルズ像は思い違っていたと分かった。

見聞したのは地下駐車場の広いスペース。レジデンスの賃料は最安価でもやはり高額。ビル内のファッションな数多くのショップにも強く印象づけられていたのか、利用者の多くは富裕層だと思っていた。

森ビルの説明によると、私の知らない六本木ヒルズのもう一つの顔があった。イベント会場では人気のスター・ウォーズ展。夏には盆踊りが開催され、飛び入り参加も歓迎した。

季節ごとのさまざまなイベントで、訪れる人が誰でも楽しめるようになっていた。施設内には森美術館や映画館もある。子供から大人まで多くの利用者に喜んでもらおうとする森ビルのビジネス展開は、私の想像を超えたものだった。

平野さんや森ビルの最大目標は、六本木の再開発プロジェクトにとどまらず、東京を世界1位の街にするという壮大なプラン。

驚いたのはほかにもあって、本社オフィスフロアに東京の街並みを1000分の1サイズに縮小した独自制作の都市模型が展開されていた。米国・ニューヨークや中国・上海の模型もあった。それらがフロア面積の大部分を占めている。

東京を俯瞰してニューヨークや上海と比較。より良い東京を目指してプロジェクトを展開する。それは“幅広い視野で物事を考える”森ビルの原点と思えた。赤坂、六本木、虎ノ門に次々と展開する高層ビル&コミュニティーはこうした発想から生まれたのだろう。

平野さんは就職活動中、専攻の理工・技術系業種のほかに視野を広げてさまざまな業界を見た結果、「仕事で何かを残したい」との思いを実現できそうな森ビルを志望した。仕事の話をする平野さんの目は輝いていた。

当初の勝手な六本木ヒルズ・イメージのように、つつい物事を狭くとらえがちな私も“幅広い視野で物事を考える”ようにすれば、森ビルや平野さんのように成功の道を見付けられるのかもしれない。

私に都市模型はないけれど、まずは俯瞰から始めよう。



都市模型を見る平野氏と学生記者・増田ゆり